

中國出土資料學會
平2019年度第1回大会

日 時：2019年7月6日（土）
受付開始 12：30～
研究報告 13：00～17：00

場 所： 成城大学 7号館3階 732教室 （東京都世田谷区成城6-1-20）
キャンパスマップ：<http://www.seijo.ac.jp/access/campusmap.html>
会場へのアクセス： 小田急線成城学園前駅北口より徒歩3分

報告Ⅰ 片倉 峻平（東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程）

発表題目：清華簡を中心とした楚簡の用字避複についての考察

発表概要： 中国において近年陸続と発見される新出土資料には、「用字避複」と呼ばれる、文字が近い位置で重複した際にその用字が差異化される現象が存在する。本稿では筆跡が比較的明瞭に判断できる「清華簡」を用いてこの用字避複について検討を行った。サンプル調査を行い客観的数値を算出したところ、用字避複は重複がある場合を全体としたわずか5%前後にしか見られず、また避複されやすい字や全く避複されない字も存在することが判明した。この結果から、従来「書写者の修辭意識が働いた結果」として説明されることの多かったこの現象には修辭意識は大きくは関わっていない、という結論を導いた。また、用字避複は書写者の専門性が進み彼らの字形知識の豊富さを主張するために用いられていたのではないか、という仮説を提示した。

報告Ⅱ 鳥羽 加寿也（大阪大学文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員（DC））

発表題目：楚簡資料による上古韻部の検討

発表概要： 本発表では、楚簡中の通仮字や伝世文献との異文を利用し、韻部の面から見た戦国楚方言のいくつかの特徴を考察する。

上古漢語の韻部を考える際には、『詩経』『楚辞』等の韻文の押韻からの帰納と、帰納結果と『切韻』音系との対応関係が重視されてきた。また、古典文献資料以外にも、チベット語をはじめとした親族言語との比較や、音韻の体系性（音理）からの考察といった手段により、現在では六母音を基礎とした体系と、それに基づく伝統的韻部の再分類が行われている。

この六母音体系に基づき再分類された韻部は、上古音系から『切韻』音系への変化を明快に説明しうる優れたものであるが、あくまで各種根拠から「総合的」に考え出された体系であり、先秦の特定の時代・地域における単一の音系と完全に一致するものではないため、個々の時代・方言については個別に考察が必要となる。実際に楚簡においても、この「総合的」分部に基いた場合には、異なる韻部の字同士が通仮している例は決して少なくはない。本発表では特にこの「異韻部通仮」に注目し、戦国楚方言の特徴についての議論を進めたい。

報告Ⅲ 林 清源（国立中興大學中國文學系特聘教授兼文學院院長）

発表題目：釋北大漢簡（參）《周馴》「非爵勿羈」一兼釋《詩·召南·行露》「誰謂雀無角」

発表概要：北大漢簡《周馴》八月章「非駿勿駕，非爵勿羈」、「非駿勿駕，毋使肖人也；非爵勿羈，毋大不仁也」中的「羈」字，學者釋讀意見頗為分歧，筆者贊成隸定作「羈」，為「羈」字異體。簡文「爵」字，學者皆讀為雀鳥之「雀」，筆者懷疑當改讀為雀鼠之「雛」。簡文「非駿勿駕，非雛勿羈」，意即「若非駿馬，就不駕馭；若非雛鼠，就不羈捕。」

《詩·召南·行露》：「誰謂雀無角？何以穿我屋？」此詩「角」字，過去有「獸角」、「鳥喙」二說，筆者贊成「獸角」說。此詩「雀」字，學者皆理解為「麻雀」，但麻雀並無穿屋築巢習慣，與下文「何以穿我屋」扞格不合，頗疑此一「雀」字也應通讀為「雛」。

☆参加費（資料代）500円

☆非会員の来聴を歓迎します

☆懇親会を予定しております。ふるってご参加ください。

連絡先（大会委員長）

〒270-8555 千葉県松戸市新松戸3-2-1

流通経済大学法学部 富田 美智江

Tel : 0297-60-1930（直通）

E-mail : tomita-michie@rku.ac.jp

成城学園前駅（北口）から学園正門まで徒歩3分

